

文を板書すること

応用物理学科 加藤 康之

本年度の優秀教員に選出していただき、大変光栄に存じます。私に投票して下さった方がいらっしゃるという事実は、授業準備や試行錯誤に向き合ううえで、大きな精神的な支えとなっています。この場を借りて感謝申し上げます。また、こうした取り組みが可能なのは、学科の先生方が長年にわたり整えてこられた教育環境があってこそだと強く実感しています。

本年度、私の授業ではスライド中心の形式から黒板に板書をする形式へと切り替えました。きっかけは、以前師から「結局**文**で理解している」と「新しいことには**慣れる**のが大事」と聞いたのを思い出したことです。当時は、理論物理の研究は華麗な式変形ができれば自然と生み出されるものだと根拠なく信じていましたので、“こくご”みたいに「言葉」が大事だとおっしゃられたことが意外でした。しかし、意識してみると、**端的な文として頭の中で反芻できるものだけが論理的な前進の礎になる**こと、さらに、論理矛盾も「文の違和感」として現れることがあるということに気がつきました。授業で黒板に書かれた文を書き写す行為は、そうした「文に慣れる」絶好の機会なのではないかと考えはじめたのでした。普通の人にはスライドを1回見るだけで慣れたりしませんが、書く行動は脳へより多くの刺激を届けてくれるはずで

しかし、前期の授業では、十分に圧縮したつもりでも板書量が多く、書き写すだけで精一杯になってしまう回がありました。これは明らかに反省すべき点であり、板書内容を見直すことにしました。すると、板書には重要なステートメントと、それを支える計算や説明の二種類があることに気がつきました。後者はどうしても長くなります。そこで後期からは、説明部分をプリントに回し、黒板には重要なステートメントのみを書く形式へと変更しました。さらに、ノートをオンラインで提出してもらい取り組みも始めました。黒板の文字を書き写すとき、人は頭の中にある知識を使って自然に補間を行います（黒板の文字がきれいでないため）。その結果、理解の程度が、ノートに滲み出ます。気がついたことがあれば、短いコメントを返したりしています。これは、まるで画面越しで受講している感覚に陥ってしまっている方に、「同じ空間で授業をしている」という感覚を持ってもらえる可能性があると思っていますからです。

今後も、常に新鮮な気持ちで授業に向き合い、担当授業の内容が、受講生の将来に役立つ事例を、一つでも多く示していきたいと思えます。学生さんの多くは、この学習の機会が自らの人生にとって限られたものであることを認識しており、学びたい、成長したいという姿勢を示しています。その思いには、可能な限り応えたいと考えています。大学以降の学習において最も重要なのは学習者自身の熱意と意欲であり、それさえあれば豊かな気持ちで取り組むことができるはずで

す。黒板に書かれた文を写すという、一見地味な作業にも、意識の持ちようによって結果が変わる可能性があるのではないかと感じてもらえたなら幸いです。